

事業名	平成23～25年度 3か年の目標	平成25年度計画	平成25年度の実施状況	新事業計画 平成23～25年度事業の実績
豊かな漁場への改善の取組	○漁業者・地元市及び県の協力による漁場改善への取組、モニタリング調査を通じた漁場改善効果の把握	1. 漁場改善策と連携したモニタリング調査 覆砂実施区画のモニタリング調査を継続 2. 「三番瀬漁場再生事業連絡協議会」の運営支援	1. 漁場改善(H23年、H24年に実施した覆砂)と連携したモニタリング調査(資料3) ・流向・流速調査(H25.11.6-12.13に実施) ・底質調査(H25.8.6に実施) ・生物調査(偶数月に実施) 2. 「三番瀬漁場再生事業連絡協議会」の運営支援。 ・H25.9.10 第4回協議会の開催(H25年度追加事業等) ・H26.3.20 第5回協議会の開催予定。(H25年度事業実施結果)	○南行徳漁協及び市川市行徳漁協が実施した漁場改善事業(市川市塩浜1丁目地先の漁業権漁場内にH23市川航路の浚渫土砂1,932m ³ 、H24君津市作木産山砂2,998m ³ を覆砂)に助成を行いました。 ○覆砂による漁場改善の効果把握するため、流向・流速、底質及び生物等について、覆砂の前後に漁業者と共同でモニタリング調査を行いました。その結果、覆砂の実施により、一定範囲内で漁場改善効果を確認することができました。
干潟漁場の環境保全	○アオサやヒトデ、ツメタガイの回収除去など良好な干潟漁場環境づくりの推進	1. 国事業(水産多面的機能発揮対策事業)を利用した漁業者グループが行う干潟保全等の取組支援 ・干潟機能の低下を招く生物の除去(アオサ、ヒトデ、ツメタガイ、魚類等) ・客土(覆砂) ・干潟漁場の底質改善や水質改善:海底耕うん、二枚貝の放流等。 ・種苗(二枚貝)の放流。 ・稚貝等の沈着促進、密度管理 ・保護区域の設定	1. アオサ:漁業者と連携して発生量モニタリング調査を実施(5月～11月、1回/月)。H25年度もH23-24年度と同様に発生量は低レベルで推移し、漁場環境への影響は軽微だった(資料4) また、これまでの結果を取りまとめ、対策手法の整理を開始 2. 発生量に応じたツメタガイの回収除去を実施 3. 漁業者グループ等による干潟環境保全活動を実施 ・覆砂(市川市行徳、南行徳漁協漁業権漁場:720m ³ 、船橋市漁協漁業権漁場:120m ³) ・海底耕うん、二枚貝の放流等の実施 ・発生稚貝の密度管理、発生稚貝の沈着促進の実施 ・保護区域(一定期間)の設定	○アオサの発生量を毎月1回、ヒトデ、ツメタガイの発生量を偶数月に調査しました。 その結果、H23年度、H24年度ともアオサの大量発生はないことから回収除去作業は実施していませんが、ツメタガイについては、H24年度に発生が見られたことから駆除を実施しました。 ○アオサの利用方法については、他県における食用、バイオマス利用などの情報を得ました。 ○H25年度からは国の事業を利用して、干潟漁場保全のために漁業者グループによる覆砂、海底耕うん、二枚貝の放流、密度管理、保護区域の設定等の活動を展開しています。
ノリ養殖対策	○三番瀬の漁場特性・環境に対応した適切なノリ養殖管理技術の向上	1. 養殖施設の適正配置の指導・育苗期のノリ芽健全度調査、生育状況の情報提供を実施 2. 10～12月にかけて場所別のノリ成長量・疾病発生状況調査を実施し、ノリ養殖管理技術の改善向上に向けた基礎データを収集・整理	1. これまでに調査した結果をもとに、漁場環境に応じた養殖指導を実施(養殖施設の適正配置や環境に応じた養殖管理の実践) 2. 漁期中の場所別のノリ成長量、疾病発生状況調査を継続。結果の整理検討(資料5)	○10～12月に2～3回/週の頻度で現場を巡回・指導し、漁場特性や環境変化に対応した漁場の行使やノリ網の管理方法の検討を進め、その結果、水温15℃を境として、高水温期には流速のある沖側漁場でノリの成長がよく、水温低下とともに岸側漁場も成長が好転することを確認しました。 また、湾口部から外洋水(暖水)が波及した場合には、沖側の漁場で影響を受けやすいことから、環境変化に対応した効果的な漁場利用を指導しました。 ○新品種ノリ「ちばの輝き」を普及しました。 ○新しいノリ品種の作出に向けて取り組んでいます。
貝類漁業対策	○アサリの冬季減耗対策、稚貝対策、ハマグリ資源の資源培養、ホンビノスガイ資源の有効活用の推進	1. 貝類資源調査 漁業者と連携し、アサリやホンビノスなどの貝類資源調査を実施し、貝類漁業対策の基礎データとする。 2. アサリの冬季減耗対策 被覆網による保護育成手法の普及と網袋を利用した保護育成手法の導入試験の実施。 3. 稚貝対策 稚貝の適地移植などの取組を支援。 4. ハマグリ資源培養 ハマグリ種苗の育成技術開発に取り組む。 5. ホンビノスガイ資源の有効活用の推進 漁獲状況と資源動向のモニタリングを継続。	1. 貝類資源調査 漁業者と連携して二枚貝資源調査を実施した(偶数月) 2. アサリの冬季減耗対策 ・予備試験で被覆網よりも効果が高かった網袋による保護育成效果の検討を開始(漁業者グループの保護区域の設定の取組の中で先行実施)(資料6) 3. 稚貝対策 ・発生稚貝の密度調整を実施 4. ハマグリ資源培養 ・着底期までの飼育条件(塩分、水温)の把握 5. ホンビノスガイ資源の有効活用の推進 ・漁獲状況と資源動向のモニタリングを継続(資料6-2、資料7) ・現行漁業権の内容へホンビノスガイの追加と発生資源の有効利用	○アサリの冬季減耗対策として有効な被覆網の実用化技術を開発しました。 ○アサリ、ハマグリ、ホンビノスガイの資源調査を偶数月、アサリの肥満度調査を毎月実施して関係漁協に提供し、資源の培養や有効利用に役立てています。 ○ハマグリ種苗の育成技術開発に取り組み、浮遊幼生期に成長や生残が良い塩分濃度を確認しました。 ○ホンビノスガイについては、25年9月の漁業権一斉切替に併せて新たに漁業権魚種に加えて、組合管理のもと資源の有効利用が行われています。
貧酸素水塊情報の高度化	○漁業者と共同で調査を実施し、「貧酸素水塊分布予測システム」の運用による貧酸素水塊情報の提供の継続、浅海域への波及を予測するシステムの開発に向けた取組	1. 漁業者と共同の海洋観測による貧酸素水塊分布の情報発信 2. 予測システムの運用による貧酸素水塊分布予測の情報発信 3. 沿岸浅海域への貧酸素水塊の波及予測システムの開発 ・沿岸浅海域貧酸素水塊予測システムの運用開始 ・水産有用種の分布実態の把握(4月から毎月1回実施)	1. 漁業者と共同の海洋観測による貧酸素水塊分布の情報発信(H25年:27回)(資料8-1) 2. 予測システムの運用による貧酸素水塊分布予測の情報発信 3. 沿岸浅海域への貧酸素水塊の波及予測システムの開発 ・H26年3月末からの運用開始(資料8-2)	○漁業者と共同で海洋観測を実施し、貧酸素水塊の分布情報を提供しました。 ○「貧酸素水塊分布予測システム」を運用し、東京湾全域の貧酸素水塊の分布を予測し、情報発信しました。 ○さらに、沿岸浅海域への貧酸素水塊の波及状況、底生生物及び水産有用種の分布実態を調査し、浅海域への貧酸素水塊の波及を予測するシステムを開発しました。